



「大人の論理」の陥穽

静岡大学学長
石井 潔

2019年9月に開催された国連気候行動サミットの中で、スウェーデンの環境活動家グreta・トゥンベリさんが自分の前を通り過ぎるアメリカのトランプ大統領をにらみつけている写真は多くの人の目を引いた。地球温暖化による急激で致命的な環境破壊に警鐘を鳴らし続けている彼女にしてみれば、明白な科学的事実から目をそらし、パリ協定からの離脱を公言している大統領は最も許されるべきでない人物であることは間違いない。

「お金と永久に続く経済成長というファンタジー」について語ることはできない大人たちの裏切りに若い世代は気づき始めているという彼女の演説は鋭く聴く者の胸に突き刺さったが、他方でこのような発言を「複雑な現実をよくわかっていない子どもの論理」として軽視しようとする大人たちが多かったことも事実である。トランプ大統領がツイッターでトゥンベリさんのことを「明るくて素晴らしい未来を楽しみにしているとても幸せな少女のように見える」言った時、これが決して単純な賛辞ではなく、「夢ばかり見て基盤となる経済活動の必要性に目を向けようとしないおめでたい子ども」という皮肉に満ちたまなざしの表現に他ならないことは誰の目にも明らかであった。

「極端なラディカリズムはかえって現実的な問題解決の障害になる」という論理自体はパークのフランス革命批判を典型とする保守主義に共通のレトリックであって特にめずらしいものではないし、必ずしも一般的に間違っているわけではない。しかし「大人」としての責任をまず考えることなしに、真剣な問題提起を行っている若い世代を「子ども」扱いして軽んじるようなことがあるとすれば、それは決して健全な保守主義とは言えない。「大人の論理」を振りかざして「子どもの夢」をつぶそうとするのではなく、環境破壊を最小限に抑制することができるような持続可能な社会システムの構築に向けた「政策」と明確な「ロードマップ」を示そうとすることが本当の意味での「大人」としてのあるべき姿であることは言うまでもないであろう。

19世紀末にイブセンが戯曲『人形の家』で、自由を求めて家を出る女性の姿を描いた時、経済的基盤のない女性が後先考えずに家庭を捨てるという行為を肯定的に描くのは無責任ではないかという批判が多くの評者から寄せられた。しかし1848年にヨーロッパ各地で起こった市民革命やミルの『自由論』など、当時の自由主義的な時代背景を受けて、自由を求めて闘う人間像を前面に打ち出そうとしていたこの時期のイブセンにとって、このような「大人の論理」はまったく考慮に値しないものであった。現代でもイブセンの作品が国境を越えて、また当時とは異なる様々な社会的問題を取り込みながら（例えば2019年11月に静岡芸術劇場でインドネシア人の演出家を迎えて上演された『ペールギュントたち』における難民問題）、絶えず新しい視点の下に繰り返し上演されているのも、彼のこのような「ラディカリズム」が時代と社会を越えた普遍性を持ち、多くの人々の心を打つからなのである。

4大公害裁判に象徴される「公害問題」においては加害者の責任は明確であり、「現実的な難しさ」を理由として責任を回避しようとする「大人の論理」が入り込む余地は少ない。しかし地球温暖化やプラスチック廃棄物問題のような「環境問題」においては「みんなの努力がないと解決できない」という形で責任が分散化される傾向にあり、また最終的には大きな社会システムの改革が必要となるが故に「そんなに簡単じゃないんだよ」と「子どもっぽい」正論を困り顔でいなそうとする「大人」の対応が正当化されやすくなっている。しかしそのような性格の問題だからこそトゥンベリさんの一切の「忖度」のない問題提起を真剣に受け止めることはすべての「大人」たちの責任である。

彼女はトランプ大統領のツイッターに対して、大統領の言葉をそのまま引用し、そうです私はまさに「明るくて素晴らしい未来を楽しみにしているとても幸せな少女」なのですと見事に切り返している。「子ども」たちの「明るくて素晴らしい未来」をまさかあなたたち「大人」が奪うことはないですよという彼女の言葉の重みを我々「大人」は決して無視してはならないのである。